



— 片山和俊氏 特別寄稿 —
第40回金山町住宅建築コンクール講評

新たな可能性と育てたい芽

DIK設計室代表
東京藝術大学名誉教授
片山 和俊 氏

平成24年度から金山町住宅建築コンクール審査委員長。また、長年にわたり金山町街並み景観審議会専門委員として、金山の景観づくりに尽力されている。



垣間見えた新しい可能性

蓋を開けて見なければ分からないことがあるものだ。

今回の住宅建築コンクールはそれを実感した審査会であった。開催前は最近の傾向通り審査対象が少なく、悲観的な見通しばかりが頭をよぎっていた。それがどうだろう、審査後は垣間見えた新しい可能性にホッとした気分が変わっていた。今回の審査対象はわずか2軒。従来の考え方に則り、新築住宅に限れば1軒で、もう1軒はリフォームとしての審査であった。

若い家族が金山に住み続けるために

新築の正野邸（株式会社青柳工務店）

は若い家族の住まいで、外観は従来の金山住宅から少しずれた洋風の香りが漂うものであった。1階に寝室・子供室、2階に居間・食堂という普通のあり方を逆転させた断面構成で、東京のような敷地が狭く建て詰まった都会に見られる解決がなされていた。実は私も試みている。比較的開口部の少ない寝室や子供室を1階に、南採光や周囲の景観を取り込むために広い開口部が欲しい居間・食堂を2階にすると、屋根下に比較的自由な空間を取ることができる。

開口部が少なく壁の多い1階は構造的にも理に叶い、多雪の風土にも合っている。この家にもその特性が生かされており、小さな家のわりに2階の食堂・居間廻りに空間があり、若い世代の暮し方や

工夫が随所に見られた。

審査会では外観が従来の金山住宅ではないことや1階について子供が成長する段階でどうだろうかとの疑問も出されたが、自分たちのイメージと金山住宅との調整を図って生まれた外観であり、狭い敷地環境を補う断面構成であること、何よりも若い家族が町へ住み続けることを積極的に応援しようという意見が大半を占め、「優良賞」を送る評価で一致した。

「再構築」という考え方

もう1軒の丹邸（金山住建）は、既存蔵を改修して住もうという計画である。

従来の区分ではリフォームだが、蔵が多い金山町では既存を用いて新たな機能にするというケースは「再構築」と考えるべきという判断が提案され、審査委員全員の賛同を得て「優秀賞」として評価することとした。

この再構築は全体に亘ってよく考えられ、入念に施工されており、金山大工技術が十分に発揮されていた。古い蔵が新しい空間として生まれ変わることを示した好例である。既存の建物が多く、これからその存続の可否が増える町で、この試みの与えるインパクトは大きい。よい影響が町民の間に広がることを期待している。

最後にエアコン室外機配置への配慮不足が委員会で指摘されたことを付け加えておきたい。内外の丁寧な作りのわりに一番目立つ箇所に無造作に室外機が置かれ、臥龍点睛を欠いていたのは残念である。

育てていきたい芽

ところで建築史家の中川理は最近の「季評」の中で、今年のサントリー学芸賞受賞の「時がつくる建築」（西洋建築史加藤耕一著）を取り上げ、その中で描かれている用途を換えながらも使い続けられてきた西欧の建築史を紹介している。現代の日本のスクラップ・アンド・ビルドの「新築主義」は、そうした歴史から見れば、むしろ例外的なものである。そして新築するのか保存するのかではなく、どうしたら建築を使い続けていけるのか、その発想がこれからの建築の「挑戦」となっていくと述べている（「建築季評」中川理・京都工芸繊維大学教授。読売新聞2017年12月28日）。

「守りながらつくる、つくりながら守る」として金山町では、この考え方を既に30数年前から実践してきている。今回の再構築はこうした「時がつくる建築」につながる試みであり、育てていきたい芽である。

とは言え、住宅建築コンクールが依然厳しい状態にあることに変わりはない。その第一は金山住宅の新築の少なさにあり、そのことは金山大工・職人技術者を評価する機会の減少に直結している。これまでも増して町民の方々に金山住宅での建設を促したい。また既定の仕組みや法制度との調整もありそうだが、皆さんと共に「再構築」の芽を育てていく道筋をこれから探っていききたいと考えている。